

# 東本願寺翻訳局目録に見える

## 「耶蘇伝」について

岩 見 至

### 序

明治初年の東本願寺に翻訳局があったこと、それに関する若干の記録、就中幾冊かの刊本と百余の訳訳原稿の写本が現存することは既に知られている<sup>①</sup>。その中に木村宗三訳「耶蘇伝」<sup>②</sup>が存在するが、これがルナンのフランス語原文からの訳訳であるか、それとも英語訳からの重訳であるかということに関して、その存在を知った当初は多分英訳からの重訳であろうと簡単に予想したのであったが、若干調査してみると案外な難関に遭遇したために、一応の推定はなしたものの附随して不明な事柄が多く出てきた。以下、重訳か否かの推定とそれに関連する若干の事情について述べるが、仮説的な言辭の多いことを、お断わりしておかねばならない。

註 ① 湯岡孝昭、「明治初年に於ける東本願寺翻訳局」私立大学図書館協会 会報 第36号。

② 乾(上巻)222丁、坤(下巻)131丁の和装本2冊にわかれ、縦書の和野紙(1頁13行)に毛筆細字で美しく清書されている。表紙には記載なく、中扉に

耶蘇伝 乾(坤) 木村宗三訳

とあり、次に上巻にのみ上下両巻の総目次(後出)を記載し、その末尾に

耶蘇伝 仏国僧侶学校教師ノ列タル「エルンストフロナン」氏1863年巴里ニ於テ此書ヲ著ス

日本東京

木村宗三翻訳

と書かれ、以下本文に進み、これ以外には下巻の末尾にも何等の記載がない。尚翻訳局の係が訳者の原稿を清書したものであって、書写生の手が加わっていないとは云えない。訳者が訳訳に用いた原書テキストは勿論残っていない。

③ かかる予想の理由の一つは、翻訳員の中に局長成島柳北以下舟橋振、山崎久太郎等英学出身者の名を多く見出したためであった。

④ 難関の大なるものは望ましいテキスト(後章において説明される)を見ること

## 2 (岩見)

が出来なかったことである。しかし皆無ではありえないと考えられるのでその所在につき御教示を乞う次第である。(追記参照)

### 1 原著について

原著はエルネスト・ルナン<sup>①</sup>畢生の2大著作の一たる「キリスト教起原史」の第1巻にあたる「イエス伝」<sup>②</sup>であって、1863年6月に初版が出版された<sup>③</sup>。ルナンその人について、又この「イエス伝」の内容等については非常に有名であるし、かつまたここではそれが当面の目標ではないので一切省略するが、この著作の出版は当時極度の関心を以って世間から期待されていた。出版されるや忽ち各国語に移されて全欧州を震撼し、ある者は憤怒しある者は驚嘆したとい<sup>④</sup>う。

かかる次第であるから「イエス伝」は多くの版を重ね<sup>⑤</sup>、更に原著者自身がその必要性を認めて手を加えた普及版の「イエス伝」も2種類出版されている。

ところでルナンはその「イエス伝」を第13版において決定的に、周到に訂正した。その第13版の刊行年を今つまびらかにしえないのであるが、第13版序文中の言葉より察すると1867年あたりであろうと考えられる。

次に「イエス伝」の英訳については、原著第13版以前の翻訳も、以後の翻訳も何種類かあることが1、2の英訳本の序からも察せられる。

筆者のせまい探索の範囲内(国内)においては、原著の第13版以前の諸版は初版以降どの版も見出しえなかった。今手元にある1本は刊行年を欠いているけれども、内容外観から推測するにまさにその第13版であるか、少くとも第13版をへだたること遠からざる版であるとみなされる。これを当面抛るべきものとみて以下「A本」と名づける。

英訳本に関しても到底そのすべての種類にあたることは不可能であったし、みたすべては原著第13版以降の版の英訳で、初版以降第12版に至る各版に抛ったものはこれまた見ることが出来なかった。たまたま最近1本を見る機会があったが、これには1863年12月8日付の序文があり、この日付は原著初版の刊年と同じである。そこでこれも当面抛るべき1本とみなし、以下「B本」と名づける<sup>⑥</sup>。

A本の対照表によってA本の本文とB本の本文を比較検討の結果、B本は原

著初版乃至それに至近の版の英訳として信頼度は充分あるものとみなされる。そこで以下の記述の便宜上A本を原著の第13版、B本を原著の初版と仮定して論を進める。

註 ① Joseph-Ernest Renan (1823—1892)

② Vie de Jésus

③ 出版社は Michel-Lévy frères, Paris.

④ 津田穰訳「イエス伝」(岩波文庫)解説参照、出版後三ヶ月で誹謗の小冊子のみでも320余種に上ったという。

⑤ 例えば鳥崎藤村が所持したものは第四十八版であった。(広瀬哲士訳「耶蘇」(東京堂)序文参照)

⑥ 筆者の見たカルマン・レヴィのポピュラー版は1925年刊で第139版である。

⑦ 第13版序文の冒頭に曰く、「この書物の初めの12の版は至極些細な点で夫々異っているにすぎない。之に反して今この版は最大の注意を以て再検討され訂正された。この著作が現われて以来四年、私はたえず改善に努めてきた云々」と。

⑧ Calmann-Lévy 版で扉に, Histoire des origines du Christianisme, Livre premier, 中扉に, ERNEST RENAN, VIE DE JÉSUS とあり, 次に, 妹への献辞, 第13版の序文, 本論(第1章—第28章), 附録, 対照表, 目次という構成で, 献辞から序論まで105頁, 本文から目次までが552頁である。刊行年はどこにも見当たらない。対照表というのは第13版の頁とそれ以前の12の版の頁との一致対照表であり, これによって第13版以降も章の数や編成に変更のないことが知られ, この本が第13版そのものであるか, 少なくとも非常に近接したものであると考えることを無理なからしめる。頁数は, 語句文章の挿入や, 脚註の訂正増加などによって第13版の方が本文において約15頁増している。

普及版は序論の代りに簡略な序文をおき, 本論が23章に減らされ, 附録も省かれている。

⑨ 筆者の参照した英訳は Renan's Life of Jesus, (W.G.Hutchison), The Scott Library と Life of Jesus, Little, Brown, and Company, Boston. 1899. の2本。英訳本は原著通りのものと, 序論, 13版序, 附録の何れかがあったりなかったりで種類が増えるようである。

⑩ 扉は次の通り

The Life of Jesus / Ernest Renan / Member of the Institute of France  
/ Complete Edition / New York / Paris / Chicago / London / Wash-  
ington / Brentano's

次に妹への献辞, 訳者の1863年12月8日付の序文(但し訳者名を欠く), 目次, 序論, 本論(第1章—第28章)となって附録はない。訳者序文の日付が原著初版と同年であるのに, 初版の英訳と断定しないのは, 註⑨のボストン版の編集者の

#### 4 (岩見)

云うところでは、原著は6ヶ月以内に11版刊行され部数は66,000部に達しているからである。併し、ルナン自身の第13版の序によって、以前の版に異同は極めて少いことが知られるから、初版の訳としても大過はないであろう。訳者名を欠いているのはカトリック側に対する遠慮ではないかと想像される。

### 2 訳稿について

訳稿原稿写本初見の際に、英語訳からの重訳であろうと単純に考えた理由の1つは「序」の註③に述べたところであるが、今1つの理由は訳稿の目次編成である。それは全体を分って三篇となし、第1篇は第1課より第6課まで、第2篇は第1課より第13課、第3篇は第1課より第9課の各課を含む。AB両本をみるまで、原著も普及版も英訳本もこのような目次編成を持つものは1本もなかったので、恐らく第13版以前の、それも英訳本からの翻訳であろうと想像したのであった。英訳本は間々原著の十分な理解の上立って丁寧な添作をする場合もあるからである。AB両本を見ることが出来た結果、その意図や理由は不明であるけれども目次の3篇分割は訳者木村の着想であると考えざるをえない。

各課の標題はしかしながら、表現に寄異を感じるものが若干あるにしてもAB両本の各章の標題と符号するのであり、その順序もまた全く合一するのである<sup>①</sup>。

本文の各課(章)を検するに、第1課の冒頭の部分数行だけは何によったのか特に推測しがたいが、その他は恐らくは語学力の、そしてまたキリスト教を含む西欧文化一般に関する知識の不足からであろうと思われる誤訳や意味不明の箇所がないわけではないが<sup>②</sup>、AB両本の異同を基に比較してみると大凡B本によったことが推定される<sup>③</sup>。即ち訳稿は原著初版に近いのである。

では訳稿はフランス語原文によるものか或いは英語訳からの重訳であるか、この点については訳文の実際、就中個有名詞の読み方によってフランス原文からの翻訳であるとみなしてよいであろう。

この推定を間接的にうらづけるものとして、訳者木村がどういう人物であったか、その洋学歴は如何、ということに関する知見が期待されるのであるが、残念ながら筆者は現在のところ有力な情報を持ちあわせていない<sup>④</sup>。

次に訳稿の成立期は何時であったか。東本願寺翻訳局の設立は1873年(明治6年8月)であり、閉局が1878年(明治11年9月)である。その間明治8年7月に翻訳局は訳文局と改称されているが、翻訳原稿写本の一部分(乾の巻の中)は訳文局と印刷された用紙を用いている。従って写本の成立が明治8年7月以降明治11年9月に至る間、即ち西暦の1875年乃至78年であると推定されるから、訳稿の成立はその間乃至その直前と思われるのである。

註 ① A本の目次と訳稿の目次とを対照してみよう。(便宜上、A本の目次を津田訳を借りて日本語で示しておく)

A 本	訳 稿
	卷ノ1 第1篇
第1章 世界の歴史におけるイエスの位置	第1課 耶蘇
第2章 イエスの幼少時—その初期の印象	第2課 耶蘇ノ幼稚其初メテ苦難ヲ受シ事
第3章 イエスの教育	第3課 耶蘇ノ教育
第4章 イエスの発展を取りまいていた思想界	第4課 耶蘇ノ發明ノ説
第5章 イエスの最初の箴言—父なる神と純粹な宗教とに関する彼の思想—最初の弟子たち	第5課 耶蘇ノ譬諭ノ語。其父神及ヒ真宗教ノ <sup>欠</sup> 案。其初メノ門徒
第6章 バプテスマのヨハネ—イエスヨハネのもとに旅し、ユダヤの荒野にとどまる—ヨハネより洗礼を受く	第6課 「ジャンバプチスト」。「ゼシユス」ジャンノ許ニ到リ「ジュデー」ノ砂漠ニ滞留ス。「ゼシユス」ジャンヨリ洗礼ヲ受ク
	卷ノ2 第2篇
第7章 神の国に関するイエスの思想の発展	第1課 耶蘇天界ノ説
第8章 カペナウムにおけるイエス	第2課 耶蘇「カペルナユム」ニ居玉フ
第9章 イエスの弟子	第3課 耶蘇ノ門徒
第10章 湖畔の説教	第4課 湖水ノ説教
第11章 貧しき者を王座に即かしめるものとして考えられた神の国	第5課 耶蘇貧人ヲ支配シ玉フ事
第12章 俘囚のヨハネからイエスへの使者—ヨハネの死—ヨハネ派とイエス派の関係	第6課 囚人ナル「ジャン」ヨリ耶蘇ニ使節ヲ送ル事。「ジャン」ノ死去。「ジャン」ノ学校ト耶蘇ノ学校トノ報告

第13章	エルサレムにおける最初の試み	第7課	耶蘇初メテ「ゼリユサルム」ニ帰リ玉フ
第14章	イエスと異教徒やサマリア人との関係	第8課	「バイアン」及ヒ「サマリアン」人ト耶蘇ノ報告
第15章	イエスに関する伝説の始め 一彼みづからが彼の超自然的役割について抱いていた観念	第9課	耶蘇ノ小説「ゼリユサルム」ニ於テ其宗教ヲ施行セント欲シ玉フ事
第16章	奇蹟	第10課	「ミラークル」寄異ノ事
第17章	神の国に関するイエスの思想の決定的形式	第11課	耶蘇天国ノ説
第18章	イエスの設けたもの	第12課	耶蘇ノ教授
第19章	次第に増してゆく熱情と亢奮	第13課	人々耶蘇ヲ信シ其徳ヲ賞ス
第20章	イエスに対する反対	卷ノ3 第3篇	
第21章	最後のエルサレムの旅	第1課	耶蘇ニ妨害ヲ為ス
第22章	イエスの敵の奸計	第2課	耶蘇「ゼリユサルム」ニ最後ノ旅行
第23章	イエスの最後の一週間	第3課	耶蘇ノ讎敵ノ盟約
第24章	イエスの逮捕と告訴	第4課	耶蘇ノ最期
第25章	イエスの死	第5課	耶蘇ノ捕縛及ヒ穿鑿
第26章	墓のイエス	第6課	耶蘇ノ死去
第27章	イエスの敵の運命	第7課	耶蘇ノ埋葬
第28章	イエスのわざの固有の性格	第8課	耶蘇ノ讎敵ノ不運不幸
		第9課	耶蘇ノ其宗教ヲ布キ玉フ時ノ尽力

「序」の註②とあわせていうと、訳稿では献辞と序論と附録とが省かれていることになるが、序論及附録は神学専攻者以外の読者にとっては必ずしも不可欠のものではないとして、普及版や英訳本の多くは之を省いているので、本訳稿に対してもとがむべきことではない。脚註をすべて省いていることについても同様である。

- ② 英訳本の訳者達が異口同音に述べているのは、原著の格調の高さを伝えることの困難さであり、この点木村訳は必ずしも勝れているとは云い難い。しかし一方、後述の如く訳業が非常に古いということのために、訳稿等も亦興味あるものであり、敢て後に実例を掲げる。
- ③④ 後出の具体例参照。
- ⑤ 訳稿は註①の目次にみられるように、個有名詞乃至個有名詞と訳者がみなした言葉は、その片仮名を「」で閉じている。今紙幅の関係上第1課(章)に限って「」つきの詞をすべて現われる順序に摘出し、それをA B両本の原語と対照してみよう。

訳稿	A本	B本
ラーギュスト	Auguste	Augustus
チペール	Tibère	Tiberius
メキシコ	Mexique	Mexico
バビロン	Babylonie	Babylonia
シーリー	Syrie	Syria
セミチック	sâmitique	Semitic
ゼルマニック	germanique	Germanic
セルチック	celtique	Celtic
シャクスベアル	Shakespeare	Shakespeare
ゴエーツ	Goethe	Goethe
ポリテイスム	polythéisme	polytheism
シムボル	Symbole	symbole
ブラマン	brahmanisme	brahmanism
ドロイド	druidisme	druidism
ラルヒム	orphisme	Orpheism
ペルシヤ	Perse	Persia
イスラム	islam	Mohammedanism
ベツアン	bédouin	Bedouin
ベニイスラエル	Beni-Israël	Beni-Israel
モワーズ	Moïse	Moses
シャルデー	Chaldée	Chaldea
ヘブロー	hébreu	Hebrew
イスラエル	Israël	Israel
ズウキフ	juif	Jewish
アスシリー	assyrienne	Assyrian
ゼリュサルム	Jérusalem	Jerusalem
エ <sup>欠</sup> ン	Éden	Eden
ゼレミー	Jérémie	Jeremiah
ゼラワ	Jéhovah	Jehovah (the Lord)
トラ	Thora	Thora
ジュージュ	Juges	Judges

訳稿	A本	B本
エゼシヤス	Ézéchias	Hezekiah
ジョジアス	Josias	Josiah
パンタテック	Pentateuque	Pentateuch
エスタラ (エスダラス)	Esdras	Ezra
子エミー	Néhémie	Nehemiah
ヲニアス	Onias	Onias
マクシャペー	Macchabées	Maccabees
パレスチヌ	Palestine	Palestine
イスラエリット	Israélite	Israelite
アブラハム	Abraham	Abraham
ジダイスム	judaïsme	Judaism
ジ(ヂ)ヤンバプテスト	Jean-Baptiste John the Baptist	
ゼシユス	Jésus	Jesus
サンポール	saint Paul	st Paul
ダニエル	Daniel	Daniel
アンチラキス	Antiochus	Antiochus
エピハス	Épiphane	Epiphanes
子ロン	Néron	Nero
メシー	Messie	Messiah
ダウキッド	David	David
サロモン	Salomon	Solomon
ソシヲスン	Sosiosch	Sosiosh
タルミュド	Talmud	Talmud
アラビヤ	arabe	Arabian
モワーズメモニッド	Moïse Maimonide Moses Maimonides	
アスモニー	Asmonéans	Asmoneans
ヘロドット	Hérode	Herod
ウキルジル	Virgile	Virgil
ジュデー	Judée	Judea

以上を通覧するだけでも、訳者が仏文をテキストとしたことは殆ど疑えないが、その他例えば「僧侶」という訳語に「サセルドース」(司祭職 *sacerdoce*) とふりがなをつけていることなども裏づけの一つとなろう。

- ⑥ 訳者木村宗三は翻訳局に「<sup>(ペーダ)</sup>韋陀教」2冊の訳稿をも提出した。これにははしがきも原著者の名前もない。ただ「明治10年2月上旬 木村宗三訳」と表紙に書かれているのみであるが、内容から英人外交官で印度研究家 B. H. Hodgson の著作であろうことは殆んど間違いない。従って訳者木村宗三は英仏両学に堪能であった人物と推定される。尚、西周の日記(明治3年)の中に木村宗三の名前を数カ所見出すのであるが、何れも来訪のことを記すのみで例えば11月11日のところに「木宗来(木村宗三)、稲田来、宗三=5両借用」とあるのが右日記中最大量の情報である。

- ⑦ 或いは訳了はずっと後で、後日送付されたのではないかとも考えたが、多屋頼俊博士の御教示によれば、訳文局の閉局時は東本願寺宗政の大混乱時であり、従って翻訳原稿写本が存在するものは大体閉局中に受け入れられたものとみてよいとのことである。

### 3 前節より導かれる他の帰結

前節までに述べたところを断定的な形で要約すると次の通りである。

木村宗三訳「耶蘇伝」は、ルナンの原著初版に近い版の仏文原典からの翻訳であり、時期は1874年から1878年に至る間である。

このことが事実であるとする、そこから2つの事柄が帰結する。1つは仮にもう10年おそいとしても間違いないことだが、この訳稿が「イエス伝」としては本邦初訳のものであること<sup>①</sup>、いま1つは明治初年に邦訳された文学思想関係仏語文献のうちでも極めて古いものに属するということである<sup>②</sup>。

註 ① 本邦における「イエス伝」の訳書については、津田訳「イエス伝」（岩波文庫本）の解説に簡略に記されているが、それを補足説明すると次の如くなる。

(1) 「ソウ耶蘇伝」網島梁川訳安部能成訳補 日高有倫堂 明治41年（1908年）従来本邦初訳とみられていたものである。Scott Library 中の、W. G. Hutchison 訳の“Life of Jesus” 1897 よりの重訳で美文体である。献辞と、独訳よりとったルナンの小伝と第1より第28章に至る本文を含む。

(2) 「耶蘇の生涯」加藤一夫訳 杜翁全集刊行会（春秋社内）大正10年（1921年）これは何本をテキストとしたのかについて何も示していない。

(3) 「耶蘇」広瀬哲士訳 東京堂大正11年（1922年）原著第58版によっている。「生涯」とか「伝」としなかったことについては序に理由を述べている。

(4) 「イエス伝」津田穰訳 岩波文庫昭和16年（1941年）献辞と序論と本文が含まれ、第13版序と附録とは省いてある。最も信頼度の高いもの。

尚「ヤソ」にあてる漢字については耶蘇、耶穌の両方があり、木村の場合には両方共用している。

- ② 明治の初年、最初に邦訳されたフランスの文献はモンテスキュー「万法精理（法の精神）」明治8年（1875）何礼之訳 ルソー「民約論」明治10年（1877）服部徳訳（中江兆民の民約訳解は明治十五年）ジュール・ヴェルヌ「80日世界1周」明治11年（1878）川島忠之助訳 フェヌロン「哲烈禍福譚（テレマックの冒険）」明治12年宮島春松訳

### 4 訳稿に関連する若干の問題点



東本願寺翻訳局設立の抱負と方針は、その刊本訳稿の目録を検することによって大体を察することが出来る<sup>①</sup>。即ち一は梵語による新しい仏教研究の地盤を形成せんとしたこと、二はキリスト教の研究である。

一体明治新政府はキリスト教に対しては幕府と同様の態度をとり、「切支丹邪宗門の儀は是迄の通り堅く御禁制の事」（明治元年）という高札を建てたことは周知の通りであるが、浦上の旧教徒の分迫放にからむ外国使節の抗議も強く、かつ明治4年に出発した使節岩倉具視等から、条約改正の為には宗教の自由を認める必要があると報告してきたこともあって、明治6年2月に件の高札は撤廃されたのである。一方明治4年頃、米国の宣教師ゴープル（J. Goble）によって新約馬太伝の翻譯がなされ、同5年には横浜の宣教師ヘボン（J. C. Hepburn）等によって馬可伝、約翰伝も邦訳され、同年3月には横浜外人居留地において本邦最初のプロテスタント教会が創立されている<sup>②</sup>。

しかしながら、一般のキリスト教をみる目はもとより深くもなく好意的でもなかった<sup>③</sup>。ただ文明開化の波の先頭に立っていたのが宣教師達であり、幕府も新政府も洋学を撰取するには止むなく彼等と接触を保たざるをえなかったわけだし、彼等もまた洋学伝播の傍ら可能な限り宣教の為にも努力したのである。

こうして一方には廃仏毀釈の嵐が吹き、他方には漸次浸透してくるキリスト教の攻勢を目前にして仏教界は正に非常のときというべきであったろう。東本願寺法主現如が新政策を断行するに先立って、先づ西欧を視察して見聞を広めんとした意気はまことに壮とすべく、翻訳局設立のこともその気宇広大な基盤から生れ出たものであった。

それにしてもルナンの「イエス伝」を翻譯予定書目に加えたのは誰であったか。例えばB本の如きアメリカ系の書肆から刊行された現物が宣教師を通じて知られていたか、もしくはその評判が伝えられていたか、とも考えられなくてもないが、矢張り東本願寺渡欧視察団の一行が彼地で入手したものと考えるのが一番穩当のように思われる<sup>④</sup>。記者木村宗三はいわゆる洋学者の中で仏学系統の人と思われるが、その履歴を詳らかにしえていない以上彼の発案ともしがたい。そのほか可能性としては、1864年（元治1年）3月に日本に着任したフランス公使ロッシュによる何等かの伝播、或いは同年5月パリで条約に調印した

外国奉行池田長発等による伝播，留学生によるものなどがあげられようが，今は全く憶測の域を出ず，疑問を提出するに止まらざるをえない。

註 ① 序の註①参照。

② 会員は押川方義，植村正久，小川義綏ら11名。

③ 例えば加藤弘之「交易問答」における頌六の言葉参照。

西周も松岡麟次郎宛の西洋哲学に対する関心を述べた書翰の中で，「彼之耶蘇教杯ハ今西洋一般之所奉ニ有之候得共，毛之生タル仏法ニ而，卑陋之極取ヘキコト無之ト相覚申候」と書いている。（西周全集第1巻所収）西周を始めとするいわゆる明六社の人々は大体においてキリスト教伝道に対しては好意的とみなされているのである。

尚，西周はオランダに留学し「政事学の大本」を学習の傍らコントの哲学にもふれたので，同じ実証主義の道をあゆみ，あれ程の物議をかましたルナン<sup>⑤</sup>の著作のことを耳にしたと考えてもおかしくはない。そしてその西と木村とは2の註⑤で示したように交渉があるのである。

④ 明治5年9月出発，明治6年7月帰朝。随員は石川舜台，松本白華，関信三，成島柳北等。

⑤ 随員の一人成島柳北は明治の著名な洋学者の1人であり，幕府の要職を退いて以後，浅草本願寺内に学舎を経営して（明治3年）洋学者を育成している。翻訳局員にはこの塾の出身者もいるのである。明治5年，東本願寺視察団に随行して通訳をつとめ，帰朝後初代翻訳局長に任ぜられたのであったが，後辞して明治7年以降「朝野新聞」社長となった。この柳北に，「航西日乗」という渡欧日記があり，それによると明治6年1月11日と24日にパリで，5月9日と17日にロンドンで，何れも書籍数十部を購入している。もとより公用の購入と思われるが残念ながら書目等は何等記載がない。（明治文化全集第16巻外国文化篇，日本評論社）

⑥ 日本における仏学の祖は村上英俊であるが，彼が仏学を習得したのは，佐久間象山から化学書を読むことを頼まれ，海外から購入した書が偶然にも蘭書でなく仏書であったので，蘭学をたよりに独習し，後村上塾（達理堂）は仏学塾として音に聞え，中江篤介もその塾生であったということを河合榮治郎が述べている（「明治思想史の1断面」選集第9巻，日本評論社）が，傍点を附したような現象が，偶々「イエス伝」について或洋学者におこらなかったとは云えない。因みに新日本史大系第五巻「明治維新」（朝倉書店）によれば，明治5年現在，東京市内だけで外国語私塾は，仏学三塾，生徒数107人，英学，洋漢学等をあわせると実に塾数16，生徒数916名に達するのである。併しその後，明治20年代に入ると仏語は凋落し代って独語が前面に出てくるのである。

補註 ① 明治5年に提出された島地黙雷の大教院分離建白書の中に「仏国有名の学士ルナン氏曰ク『仏教のチベットに入る其人民に善功ある大也云々』とあ

る。黙雷も恐らくヨーロッパ滞在中にルナンの知識をえたのであろう。

- ② もしルナンの原書が柳北の購入図書の中にあつたとすれば、帰朝が明治6年(1873)、木村の「韋陀教」訳了が10年(1877)であることを考えると「イエス伝」訳業は7年8年(1874, 5)の可能性が強い。

## 5 訳文の実際

以下〔I〕〔II〕〔III〕3ケの実例を掲げる。必ずしも最適とは云えぬが、〔I〕〔II〕はA本とB本の相異を示す意味において、〔II〕〔III〕はルナンの面目が表白せられていという意味において摘出した。〔I〕は第2篇第12課耶蘇ノ教授(A B両本共に第18章イエスの設けたもの)、〔II〕は第3篇第7課耶蘇ノ埋葬(A B両本共に第26章墳墓のイエス)、〔III〕は第3篇第9課耶蘇ノ其宗教ヲ布キ玉フ時ノ尽力(A B両本共に第28章イエスのわざの固有の性格)よりの引用で夫々A B両本中では1つのパラグラフであるが便宜上夫々数ケに分割し、B本、A本、訳稿の順序で並列した。脚註の番号などはA B両本ともそのままに附しておいた。訳稿は全体として註を省略している。

### 〔I〕

〔B〕 Their repasts were amongst the sweetest moments of the infant community. At these times they all assembled; the master spoke to each one, and kept up a charming and lively conversation. Jesus loved these seasons, and was pleased to see his spiritual family thus grouped arround him.<sup>②</sup>

- ② Luke xxii. 15

〔A〕 Les repas étaient devenus dans la communauté naissante un de<sup>s</sup> moments les plus doux. A ce moment, on se rencontrait; le maître parlait à chacun et entretenait une conversation pleine de gaieté et de charme. Jésus aimait cet instant<sup>1</sup> et se plaisait à voir sa famille spirituelle ainsi groupée autour de lui.<sup>①</sup>

- ① Luc, xx, 15.

〔訳〕 夫レ食事ハ最モ静ナル時ニ方リ組ヲ結ヒナス事トナリタリ此時ニ方リテハ人々互ニ出會シ耶蘇ヨリ各人ニ説話ヲ為シ玉ヒ各人ヨリモ耶蘇ニ説話ヲナシ互ニ樂シミ悦ヒタリト云フ耶蘇ハ此食事ノ時ヲ好ミ其身ノ周圍ニ人々ノ羣集スルヲ其家族ヲ見ルト同様ニ樂トセリ

[A] L'usage juif était qu'au commencement du repas, le chef de maison prit le pain, le bénit avec une prière, le rompit, puis l'offrit à chacun des convives. Le vin était l'objet d'une sanctification analogue.<sup>②</sup> Chez les esséniens et les thérapeutes, le festin sacré avait déjà pris l'importance rituelle et les développements que la cène chrétienne prendra plus tard.<sup>③</sup>

② Matth., xiv, 19; Luc, xxiv, 30; Act., xxvii, 35; Talm. de Bab., Berakoth, 376. Cet usage se pratique encore aux tables israélites.

③ Philon, De vita contempe., §6-11; Josèphe, B.J., II, viii, 7.  
[この部分, (B), (訳)になし, 第13版の挿入部であろう]

[B] The participation of the same bread was considered as a kind of communion, a reciprocal bond. The master used, in this respect, extremely strong terms, which were afterwards taken in a very literal sense. Jesus was, at the same time, very idealistic in his conceptions, and very materialistic in his expression of them.

[A] La participation au même pain était considérée comme une sorte de communion, de lien réciproque.<sup>④</sup> Jésus usait à cet égard de termes extrêmement énergiques, qui plus tard furent pris avec une littéralité éffrénée. Jésus est à la fois très-idéaliste dans les conception et très-matérialiste dans l'expression.

④ Act., II, 46; xx, 7, 11; I cor., x, 16-18.

[訳] スク同席ニテ同一ノ「パン」ヲ食スルヲ晩飯ノ社□トナシタリ耶蘇ハ此飯ノ礼ヲシテ必ス為サスンハ非ラストノ玉ヘリ爰ヲ以テ後世ニ至リ矢張此礼ヲ用ユル事トナリタリ耶蘇ハ想像ヲ以テ論スル時ハ大ナル想像人タリ事ヲ弁明スルニ於テハ人ノ機関魂魄ヲ論スル人ナリ

[□の部分に中の文字らしきものが見られる]

[B] Wishing to express the thought that the believer only lives by him, that altogether (body, blood, and soul) he was the life of the

truly faithful, he said to his disciples, "I am your nourishment," — a phrase which, turned in figurative style, became, "My flesh is your bread, my blood your drink."

[A] Voulant rendre cette pensée que le croyant vit de lui, que tout entier (corps, sang et âme) lui Jésus est la vie du vrai fidèle, il disait à ses disciples: 《Je suis votre nourriture,》 phrase qui, tournée en style figuré, devenait: 《Ma chair est votre pain, mon sang est votre breuvage.》

[訳] 夫レ耶蘇ヲ信スル人ハ体ト血ト魂魄ノ三物ハ皆耶蘇ノ生命ナル事ヲ知ル者ナリ耶蘇其門徒ニ云ヘルアリ曰ク余ハ汝等ノ食料ナリ此語ハ転シテ云フ時ハ曰ク余肉ハ汝等ノ「パン」余血ハ汝等ノ飲料ナリ

[B] Added to this the modes of speech employed by Jesus, always strongly subjective, carried him still further. At table, pointing to the food, he said, "I am here" — holding the bread — "this is my body;" and of the wine, "This is my blood," — all modes of speech which were equivalent to, "I am your nourishment."

[A] Puis les habitudes de langage de Jésus, toujours fortement substantielles, l'emportaient plus loin encore. A table, montrant l'aliment, il disait: 《Me voici;》 tenant le pain: 《Ceci est mon corps;》 tenant le vin: 《Ceci est mon sang;》 toutes manières de parler qui étaient l'équivalent de 《Je suis votre nourriture》.

[訳] 耶蘇ノ言葉ハ如何ニモ高尚ニシテ意味深長ト云フヘシ 食盤上ニ於テハ食物ヲ示シ玉フ曰ク余ヲ見ヨ余「パン」ヲ採ル是レ余ノ体ナリ余葡萄酒ヲ採ル是レ余ノ血ナリ惣テ其説話シ玉フ所ハ余ハ汝等ノ食料ナリト云ヒ玉フト全ク同一ノ義ナリ

## [II]

[B] On the Sunday morning, the women, mary Magdalen the first, came very early to the tomb. The stone was displaced from the open-

ning, and the body was no longer in the place where they had laid it. At the same time, the strangest rumours were spread in the Christian community.

⑥ Matt. xxviii, 1; Mark xvi, 1; Luke xxiv, 1; John xx, 1.

[A] Le dimanche matin, les femmes, marie de magdala la première, vinrent de très-bonne heure au tombeau. La pierre était déplacée de l'ouverture, et le corps n'était plus à l'endroit où on l'avait mis. En même temps, les bruits les plus étranges se répandirent dans la communauté chrétienne.

④ Matthieu, xxviii, 1; Marc, XVI, 1; Luc, xxiv, 1; Jean, XX, I.

[訳] 日曜日ノ朝「マリードマグダラ」諸人ニ先チ未明ニ耶蘇ノ墓所ニ来リ見ルニ門ニ疊ミタル石ハ外ニ取除キ耶蘇ノ死体ハ昨日埋メタル所ニ非レハ聖教会社ノ者一同寄異ノ思想ヲ起シ驚サル者ナン

[B] The cry, "He is risen!" quickly spread amongst the disciples. Love caused it to find ready credence everywhere. What had taken place? In treating of the history of the apostles we shall have to examine this point and to make inquiry into the origine of the legends relative to the resurrection. For the historian, the life of Jesus finishes with his last sigh.

[A] Le cri «Il est ressuscité!» courut parmi les disciples comme un éclair. L'amour lui fit trouver partout une créance facile. Que s'était-il passé? C'est en traitant de l'histoire des apôtres que nous aurons à examiner ce point et à rechercher l'origine des légendes relatives à la résurrection. La vie de Jésus, pour l'historien, finit avec son dernier soupir.

[訳] 依テ人々皆耶蘇ハ蘇生シ玉フト叫ヒタルニ耶蘇ノ声其門弟ノ耳ニ聞ヘ余ハ蘇生シタリト其門弟ニノミ其声ノ聞ヘンハ平日耶蘇ヲ恋慕シ信スルニ依ル所ナラン此蘇生ノ事ニ付テハ諸説紛々トシテ一定セス爰ヲ以テ其門弟ノ云フ

所ヲ以テ信トスルノ外ナシ記録家ノ説ニハ耶蘇ノ命ハ其最期ノ溜息ト共ニ消  
へ失セタリ

[B] But such was the impression he had left in the heart of his disciples and of a few devoted women, that during some weeks more it was as if he were living and consoling them. Had his body been taken away, or did enthusiasm, always credulous, create afterwards the group of narratives by which it was sought to establish faith in the resurrection? In the absence of opposing documents this can never be ascertained.

① See Matt. xxviii. 15; John xx. 2.

[A] Mais telle était la trace qu'il avait laissée dans le coeur de ses disciples et de quelques amies dévouées que, durant des semaines encore, il fut pour eux vivant et consolateur. Par qui son corps avait-il été enlevé? Dans quelles conditions l'enthousiasme, toujours crédule, fit-il éclore l'ensemble de récits par lequel on établit la foi en la résurrection? C'est ce que, faute de documents contradictoires, nous ignorerons à jamais.

① Voir Matth., xxviii, 15; Jean, xx. 2.

[訳] 然ルニ耶蘇ノ云ヒ玉ヒシ事アリ其門弟ト其友人ノ為メニ一週間ハ必ス存命シアルヘシト此事ヲ深く信スルヨリ死シ玉ハサルト心ニ想像スル事ナラン其死体アツテ蘇生ト云バ鳥ノ孚化スルト齊トシ是レ全ク信心ノ深キ所ヨリ生スルモノナラン余等ニ於テハ其蘇生ノ理アルヲ知ラス

[B] Let us say, however, that the strong imagination of Mary Magdalen played an important part in this circumstance. Divine power of love! Sacred moments in which the passion of one possessed gave to the world a resuscitated God!

② She had been possessed by seven demons, (Mark xvi. 9; Luke viii, 2.)

③ This is obvious, especially in the ninth and following verses of chap. xvi. of Mark. These verses form a conclusion of the second Gospel, different from the conclusion at xvi. 1-8, with which many manuscripts terminate. In the fourth Gospel, (xx. 1, 2, 11, and following, 18,) Mary Magdalen is also the only original witness of the resurrection.

[A] Disons cependant que la forte imagination de Marie de Magdala<sup>②</sup> joua dans cette circonstance un rôle capital.<sup>③</sup> Pouvoir divin de l'amour ! moments sacrés où la passion d'une hallucinée donne au monde un Dieu ressuscité !

② Elle avait été possédée de sept démons (Marc, xvi, 9: Luc, viii, 2)

③ Cela est sensible surtout dans les versets 9 et suivants du chapitre xvi de Marc. Ces versets forment une conclusion du second Évangile, différente de la conclusion xvi, 1-8, après laquelle s'arrêtent le manuscrit B du Vatican et le Codex Sinaïticus. Dans le quatrième Évangile (xx, 1-2, 11 et suiv., 18), Marie de Magdala est aussi le seul témoin primitif de la résurrection.

[訳] 然ルニ「マリードマグダラ」ノ耶蘇ヲ信スル事深キヨリ其心天ニ通シ天ヨリ蘇生シ玉フ神ヲ世界ニ降シ玉フモノナラン

### [III]

[B] This sublime person, who each day still presides over the destiny of the world, we may call divine, not in the sense that Jesus has absorbed all the divine, or has been adequate to it, (to employ an expression of the schoolmen) but in the sense that Jesus is the one who has caused his fellow-men to make the greatest step towards the divine.

[A] Cette sublime personne, qui chaque jour préside encore au destin du monde, il est permis de l'appeler divine, non en ce sens que Jésus ait absorbé tout le divin, ou lui ait été identique, mais en ce sens que Jésus est l'individu qui a fait faire à son espèce le plus grand pas vers le divin.

[訳] 夫レ耶蘇ハ人ノ善悪ニ依リ幸不幸ヲ与ユル人ニシテ神ト呼ブモ不可ナリ



トスルモノナン然ルニ諸神々ノ上ニ立ツ人ニ非ラス天帝ノ近傍ニアッテ神ニ列スル人ナリトス (是レ何レモ学校ニテ云フ事ナリ)

〔B〕 Mankind in its totality offers an assemblage of low beings, selfish, and superior to the animal only in that its selfishness is more reflective. From the midst of this uniform mediocrity, there are pillars that rise towards the sky, and bear witness to a nobler destiny. Jesus is the highest of these pillars which shew to man whence he comes, and whither he ought to tend.

〔A〕 L'humanité prise en masse offre un assemblage d'êtres bas, égoïstes, supérieurs à l'animal en cela seul que leur égoïsme est plus réfléchi. Cependant, au milieu de cette uniforme vulgarité, des colonnes s'élèvent vers le ciel et attestent une plus noble destinée. Jésus est la plus haute de ces colonnes qui montrent à l'homme d'où il vient et où il doit tendre.

〔訳〕 夫レ耶蘇ハ無欲ノ人ニシテ吾人ノ為メニ利益トナル事ノミヲ主トシ其身ノ為メニ利益トナル事ヲ好ミ玉ハス故ニ我慾ノ者ノ上ニ立ツ人ナリ之ヲ記念表ニ譬ユレハ数百ノ記念表アレトモ耶蘇ノ記念表ハ天ニ達スル程高シト云フ故ニ人間中ニ於テ最モ貴クシテ人間ノ上ニ立チ玉フ人ナリ

〔B〕 In him was condensed all that is good and elevated in our nature. He was not sinless; he has conquered the same passions that we combat; no angel of God comforted him, except his good conscience; no Satan tempted him, except that which each one bears in his heart.

〔A〕 En lui s'est condensé tout ce qu'il y a de bon et d'élevé dans notre nature. Il n'a pas été impeccable; il a vaincu les mêmes passions que nous combattons; aucun ange de Dieu ne l'a conforté, si ce n'est sa bonne conscience; aucun Satan ne l'a tenté, si ce n'est celui que chacun porte en son coeur.

[訳] 耶蘇ニ於テモ吾人ト同様其心ニハ善悪アリ其好ミ玉フ事モアリタレトモ常ニ善ヲ以テ悪ニ勝ツ事ヲ務メ玉ヒシ人ナレハ無罪ナル人ニアラス左レ共其悪ヲ捨テ善ヲ行ヒシ人ナリ是レ凡人ノ能ハサル所ナリ又神ヨリ神使ヲ降タシ耶蘇ヲ助ケテ善ヲ行ハシメタルニ非ラス又悪魔ヨリ悪ヲ行ハシメシ人ニ非ラス其心ニ於テ其好ム所ノ慾ヲ制シ善ヲ行ヒ悪ヲ行フヲ嫌ヒ玉ヒシ人ナリ

[B] In the same way that many of his great qualities are lost to us, through the fault of his disciples, it is also probable that many of his faults have been concealed. But never has anyone so much as he made the interests of humanity predominate in his life over the littlenesses of self-love.

[A] De même que plusieurs de ses grands côtés sont perdus pour nous par suite de l'inintelligence de ses disciples, il est probable aussi que beaucoup de ses fautes ont été dissimulées. Mais jamais personnes autant que lui n'a fait prédominer dans sa vie l'intérêt de l'humanité sur les vanités mondaines.

[訳] 耶蘇ノ教ヘ玉ヒシ件々多クアリタレトモ其門弟ノ誤聞誤解アッテ存スルモノ少シ其存スル所ノ教ト雖偽詐ノ事ノミ多シ其教ノ残ル所少キハ実ニ惜シムヘシ夫レ人タル者ハ慾心ノナキ事能ハス然ルニ耶蘇ニ於テハ更ニ慾心ナカリシヲ以テ見レハ大量ニシテ人ニ秀テ玉フ所ナリ

[B] Unreservedly devoted to his mission, he subordinated everything to it to such a degree that, towards the end of his life, the universe no longer existed for him. It was by this access of heroic will that he conquered heaven. There never was a man, Çakya-mouni perhaps excepted, who has to this degree trampled under foot, family, the joys of this world, and all temporal care. Jesus only lived for his Father and the divine mission which he believed himself destined to fulfil.

[A] Voué sans réserve à son idée, il y a subordonné toute chose et un

tel degré que l'univers n'exista plus pour lui. C'est par cet accès de volonté héroïque qu'il a conquis le ciel. Il n'y a pas eu d'homme, Çakya-mouni peut-être excepté, qui ait à ce point foulé aux pieds la famille, les joies de ce monde, tout soin temporel. Il ne vivait que de son Père et de la mission divine qu'il avait la conviction de remplir.

[訳] 耶蘇ノ天ニ昇リ玉ヒタルヨリ六合萬物ハ耶蘇ノ支配ヲ受ケサルモノナン故ニ耶蘇ノ生命消滅セントスルニ至ル時ハ萬物皆存スル者ナシト云フ是レハ其威權ノ盛ナルヲ賞シテ云フモノナラン夫レ積迦ヲ除クノ外耶蘇ノ如ク其家族ヲ捨テ萬民ノ為メニ苦勞シー時世ノ苦難ヲ救ントテ世ニ出テタル人ハ耶蘇ノ外ナカルヘシ耶蘇ハ其父天帝ノ為メニ其役務ヲ以テ世ニ出テ其役務ヲ達シタル人ナリ

附 年表 (本稿並びに仏学に関連する主なる項目のみ)

- 1808 (文化5) 幕府、長崎通詞6人に商館長ゾーフよりフランス語を学ばせる
- 1856 (安政3) 旗本子弟の蕃書調所(旧洋学所)就学許可
- 1857 (安政4) 村上英俊「仏蘭西詞林」
- 1858 (安政5) フランスと修好通商条約
- 1862 (文久2) 幕府派遣オランダ留学生榎本武揚ら出発、蕃書調所を洋書調所と改称
- 1863 (文久3) ルナン「イエス伝」、井上、伊藤ら英留学のため出発、外国奉行池田長発ら欧州へ出発、洋書調所を開成所と改称
- 1864 (元治1) 仏公使ロッシュ着任、池田使節バリ条約調印、村上英俊「仏語明要」
- 1866 (慶応2) 加藤雪州「仏語箋」開成所「法朗西単語篇1」
- 1868 (明治1) 福沢、英学塾を移転し慶応義塾と改称
- 1870 (明治3) 山県ら欧州より帰国、軍政改革(海軍英式、陸軍仏式)、橋爪貫一「仏学糖位七ツ以呂波」
- 1871 (明治4) 岩倉具視ら欧米へ出発
- 1872 (明治5) 東本願寺視察団渡欧
- 1873 (明治6) 全国キリスト教禁制の高札撤廃、東本願寺視察団帰国、岩倉ら帰国、開成学校開校、明六社設立、東本願寺翻訳局設立
- 1874 (明治7) 翻訳局東京支局廃止、明六雑誌刊
- 1875 (明治8) 翻訳局を訳文局と改称、同志社英学校開校、福沢「文明論之概略」、何礼之訳「万法精理」、(木村訳「イエス伝」?)
- 1877 (明治10) 服部徳訳「民約論」、木村訳「韋陀教」
- 1878 (明治11) 訳文局閉局、川島忠之助訳「八十日間世界一周」

- 1879 (明治12) 宮島春松訳「哲烈禍福譚」  
1881 (明治14) 松岡亀雄訳「仏國  
情話五九節操史」  
1882 (明治15) 中江兆民訳「民約訳解」, 村上英俊「仏英独三国会話」  
1908 (明治41) 綱島, 安部訳「ルネ  
シ民耶蘇伝」

以下略

〔追記〕

原著第1～12版については、最終的にはパリへ照会するほかないが、時間的余裕と不精とから先にのぼしていたところ、大阪大学の原教授より Bibliothèque Nationale の蔵書目録の写しの一部をお送りいただき、不明の点が一部解消したので本文を訂正するとともに御教示に御礼申上げる。その目録によれば、1863年中に第10版まで刊行され、第13版は1864年の刊行である。